査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

「建築史概説」では、実習生の全員が建築学とはまったく関連のない学部に所属していることから、まず飛鳥時代における伽藍配置の推移を説明し、山田寺金堂復原模型を用いて飛鳥時代建築における細部の様式および特徴、部材の名称、奈良時代建築との違いなど簡単に講義しました。これをもとにして、演習では建物がどのように組み上がっているのかを自分の目で確かめてもらうために、復原された山田寺東回廊の展示部分のスケッチをおこないました。このような経験は大学ではほとんどないらしく、てこずる実習生もいました。

今年度の博物館実習が実習生にとって有益なものとなったかは現段階ではわかりません。しかし、少なくとも飛鳥時代に興味をもってもらうことはできたように思います。実習生の受け入れは、来年度も引き続きおこなわれます。はたして、次回は実習生が何人来るのでしょうか。（飛鳥資料館）

研究会の開催

古代瓦研究会第５回シンポジウム

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、日本最古の寺院である飛鳥寺（588年創建）の瓦を皮切りに、古代の瓦を製作技法の面から見直そうという試みをつづけています。1998年以降、それに関わる４回のシンポジウムを奈文研で開催しましたが、６月23・24日の両日には、会場をはじめて千葉大学に移し、山田寺式軒瓦の東国への展開をテーマに、研究報告と討議をおこないました。

会場には、各地の寺院出土瓦を持ち寄っていただき、実物を前にして活発な意見が交わされました。こうした積み重ねにより、従来、文様に偏りがちであった瓦研究に、新たな局面を切り開くことを期待しています。あわせて、開催にあたりご協力いただいた関係者・関係機関にあつく御礼申し上げます。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

シンポジウム会場全景

研究室紹介

歴史研究室（文化遺産研究部）

奈文研発足当初に、南都諸寺社の文献史料部門、考古部門の調査研究を目的に設置された歴史研究室は、考古部門が1964年に分離して以降、定員１名と併任数名の体制で、南都の諸大寺や大社が所蔵する書跡資料の調査、研究を継続してきました。

そしてこのたび、奈文研の独立行政法人化に伴い、新しく設置された文化遺産研究部の１研究室（定員２名）となり、建造物研究室、遺跡研究室とともに、文化遺産についての総合的な調査研究をおこなうこととなりました。

世界遺産条約の文化遺産の定義には、書跡資料の類は含まれていませんが、我が国には、世界でも稀に古くからの書跡資料が数多く遺存しています。そこに、文化的知的財産としての文化遺産を、よりトータルにとらえる調査研究体制ができたことは大きな意義があるのではないでしょうか。

歴史研究室は、歴史資料を主たる調査研究対象としておりますが、そのなかでも文字が書かれている資料を中心に、従来から継続的に調査してきました。南都、すなわち奈良には、東大寺をはじめ数多くの古くからの大寺があります。そこに所蔵されている

北浦定政関係資料（大和国坪割細見図 天理市北部付近）